

「ごんぎつね」指導法研究への序章

— 「ごん狐」から「ごんぎつね」へ —

金 戸 清 高

1. はじめに

「ごんぎつね」は現在、小学校4年生の教材として、「すべての国語教科書に採用されている」¹。1956年から現在まで、半世紀に亘って教材として採り上げられ続けた例は稀ともいえる。これについては様々な理由が考えられるであろうが、端的にいえば、この物語が文学としても、また教材としても魅力的であるからに他ならない。この「ごんぎつね」について、教育の現場から、あるいは文学研究の側から、今なお新たな読みの可能性が提示され続けている²ことは重要な意味を持つ。本稿執筆の目的は、「ごんぎつね」を、文学と教材との狭間から、その魅力の要因を探ることにある。

2. 文学から教材への移行についての問題

新美南吉「ごん狐」は『赤い鳥』1932年1月号に掲載されたが、これは『赤い鳥』主監、鈴木三重吉の大幅な手が入ったものといわれる。『スパルタノート』には「赤い鳥に投ず」とされた「権狐」（1931年10月4日）をその原型として見ることができる。「権狐」から「ごん狐」への異同等については水谷昭夫「新美南吉の世界」³木村巧「新美南吉『権狐』論—『権狐』から『ごん狐へ』—」⁴を始めとした多くの詳細な研究がなされている。

ところが、「ごん狐」がどのような本文校訂を経て学習教材「ごんぎつね」に到ったかについては、あまり顧みられてはいない。文学から教材への移行において、「権狐」から「ごん狐」に到るほどの大きな改変はないだろうと予想されるが、試みに『校訂新美南吉全集第三巻』⁵所収の「ごん狐」と光村図書『国語四下 はばたき』⁶所収の「ごんぎつね」との異同を調査したところ、何と461箇所にあつた異同が窺われた。今回行った調査では、新旧漢字および仮名遣いの異同は本論の趣旨ではないので除外したのだが、それでもこの変更箇所の多さには少なからず驚かされた。これから教材「ごんぎつね」を研究して行く上でも、この改編は無視できないので、いささか迂遠ではあるがこの二者の異同の実体を掲載し、調査分類しておく。

ごん狐（ごんぎつね₁）

— (1₂) —

1 段目 私が小さいときに（わたし₃）がちいさいときに、） おぢいさんからきいた（おじいさんから聞₄いた）

- 2 段目 むかしは、(昔₅ は、) 私たちの(わたし₆ たちの) ちかくの、(近₇ くの、) と
 ころに(所₈ に、₉) お城があつて、(おしろ₁₀ があつて、) 中山さまといふおと
 のさまが、(中山様₁₁) というおとの様₁₂ が)
- 3 段目 その中山から、₁₃ (その中山から) 「ごん狐」という狐がゐました。(「ごんぎつね
₁₄」というきつね₁₅ がいました。) ひとりぼつちの小狐で、(ひとりぼつちの小ぎつ
_ね₁₆ で、) したの一ぱいしげつた(した₁₇ のいつ₁₈ ぱいしげつた) 森の中に(森
 の中に、₁₉) 穴をほつて(あな₂₀ をほつて) あたりの村へ出て来て、(辺₂₁ りの
 村へ出てき₂₂ て、) はたけへはいつて(畑₂₃ へ入₂₄ っつて) 芋をほりちらしたり、
 (いも₂₅ をほり散₂₆ らしたり、) 菜種がらの、₂₇ ほしてあるのへ(菜種がらのほし
 てあるのへ) 百姓家の裏手に(百姓家のうら₂₈ 手に) とんがらしをむしりとつて、₂₉
 いたり、(とんがらし₃₀ をむしり取₃₁ っつていたり、)
- 4 段目 或秋のことでした。(ある₃₂ 秋のことでした。) 二三日雨がふりつづいた(二、₃₃
 三日雨がふり続₃₄ いた) 出られなくて穴の中に(出られなくて、₃₅ あな₃₆ の中に)
- 5 段目 雨があがると、(雨が上₃₇ がると、) 百舌鳥の声がきんく、₃₈ (もず₃₉ の声がキ
 ンキン₄₀)
- 6 段目 堤まで出て来ました。(つつみ₄₁ まで出てき₄₂ ました。) あたりの、₄₃ すゝきの穂
 には、(辺₄₄ りのすすきのほ₄₅ には、) 川はいつもは(川は、₄₆ いつもは) 水が、₄₇
 どつとましてゐました。(水がどつとましていました。) すゝきや、₄₈ 萩の株が、(す
 すきやはぎ₄₉ のかぶ₅₀ が、) 黄いろくにごつた水に(黄色₅₁ くにごつた水に) ご
 んは川下の方へと、(ごんは、₅₂ 川下の方へと、) ぬかるみみちを(ぬかるみ道₅₃
 を)
- 7 段目 見つからないやうに、₅₄ そうつと(見つからないようにそうつと) 深いところへ(深
 い所₅₅ へ) じつとのぞいて見ました。(じつとのぞいてみ₅₆ ました。)
- 8 段目 兵十はぼろく の黒いきものを(兵十は、₅₇ ぼろぼろの黒い着物₅₈) を 腰のところま
 で(こし₅₉ の所₆₀ まで) 魚をとる、₆₁ はりきりといふ、₆₂ 網を(魚をとるはりきり₆₃
 というあみ₆₄) を まるい萩の葉が一まい、(円₆₅ いはぎ₆₆ の葉が一まい、) 大き
 な黒子みたいにへばりついて(大きなほくろ₆₇ みたいにへばり付₆₈ いて)
- 9 段目 はりきり網の一ばんうしろの、袋のやうに(はりきり₆₉ あみ₇₀ のいち₇₁ ばん後₇₂ ろの、
 ふくろ₇₃ のやうに) もちあげました。(持₇₄ ち上₇₅ げました。) 芝の根や、(し
 ば₇₆ の根や、) 木ぎれなどが、(木切₇₇ れなどが、) はいつてゐましたが、(入₇₈
 っていました、) でもところぐ、(でも、₇₉ ところどころ、) 白いものが(白
 い物₈₀ が) ふというなぎの腹や、(太₈₁ いうなぎ₈₂ のはら₈₃ や、) 大きなきすの
 腹でした。(大きなきす₈₄ のはら₈₅ でした。) ごみと一しよに(ごみといつ₈₆ しよ
 に) そして又、袋の口をしぼつて、(そして、₈₇ また₈₈ 、ふくろ₈₉ の口をしぼつて、)
- 10 段目 兵十はそれから、(兵十は、₉₀ それから、) びくをもつて川から上り(びくを持₉₁
 っつて川から上₉₂ り、₉₃) 土手においといて、(土手に置₉₄ いといて、)
- 11 段目 草の中からとび出して、(草の中から飛₉₅ び出して、) ごんはびくの中の魚を(ごん
 は、₉₆ びくの中の魚を) はりきり網のかゝつてゐるところより(はりきり₉₇ あみ₉₈
 のかかっている所₉₉ より) ぼんく なげこみました。(ぼんぼん投₁₀₀ げこみました。)
 「とぼん」と音を立てながら(トボン、₁₀₁ と音を立てながら、₁₀₂)

- 12段目 一ばんしまひに、(いち₁₀₃ ばんしまいに、) 何しろぬるくと(なに₁₀₄ しろぬるぬると) ごんはじれつたくなつて、(ごんは₁₀₅ じれつたくなつて、) 頭をびくの中につつこんで、(頭をびくの中につつ₁₀₆ こんで、) うなぎは、キュッと行って、(うなぎは、キュッと₁₀₇ いて、) まきつきました。(まき付₁₀₈ きました。) 向うから、(向₁₀₉ うから、/) 「うわアぬすと狐め。」と₁₁₀ (「うわあ₁₁₁ ₁₁₂ ぬす₁₁₃ とぎつね₁₁₄ め。」₁₁₅ と) びつくりしてとびあがりました。(びつくりして飛₁₁₆ び上₁₁₇ りました。) 首にまきついたまゝ(首にまき付₁₁₈ いたまゝ) ごんはそのまゝ横つとびにとび出して一しょうけんめいに₁₁₉ (ごんは₁₂₀ そのまゝ横つ飛₁₂₁ びに飛₁₂₂ び出して、一生₁₂₃ けんめいに)
- 13段目 近くの₁₂₄ はんの木の(近くのはん₁₂₅ の木の) 下でふりかへつて見ましたが、(下でふり返₁₂₆ ってみ₁₂₇ ましたが、)
- 14段目 ごんは₁₂₈ ほつとして、(ごんはほつとして、) やつとはづして穴のそとの₁₂₉ (やつと外₁₃₀ して₁₃₁ あな₁₃₂ の外₁₃₃ の)

二 (2₁₃₄)

- 1段目 弥助といふお百姓の家の裏を(弥助というお百姓のう₁₃₅ のう₁₃₆ を) その₁₃₇ いちぢくの木の(そのいちぢくの木の) おはぐろをつけてみました。(お齒黒₁₃₈ を付₁₃₉ けていました。) 鍛冶屋の新兵衛の家のうらをとほると、(かじ₁₄₀ 屋の新兵衛のう₁₄₁ のうらを通₁₄₂ ると、) 髪をすいてみました。(かみ₁₄₃ をすいていました。) ごんは、₁₄₄ 「ふふん、(ごんは、「ふふん、) と思ひました。₁₄₅ 「何(と思ひました。「何) 秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の(秋祭り₁₄₆ かな。祭り₁₄₇ なら、たいこ₁₄₈ や笛の)
- 2段目 やつて来ますと、(やってき₁₄₉ ますと、) 表に赤い井戸のある₁₅₀ 兵十の家の(表に赤い₁₅₁ のある兵十のう₁₅₂ の) その小さな₁₅₃ こはれかけた(その小さなこわれかけた) 大勢の人があつまつてみました。(大勢の人が集₁₅₄ まっていました。) 腰に手拭をさげたりした女たちが、(こし₁₅₅ に手ぬぐい₁₅₆ を下₁₅₇ げたりした女たちが、) 大きな鍋の(おお₁₅₈ きななべ₁₅₉ の) 何かぐづぐづ煮えてみました。(何かぐづぐづにえ₁₆₀ っていました。) 葬式だ。」とごんは思ひました。₁₆₁ 「兵十の家の(そう₁₆₂ 式だ。」とごんは思ひました。「兵十のう₁₆₃ の)
- 3段目 お午が(お昼₁₆₄ が) 墓地へいつて、(墓地へ行₁₆₅ いて、) 向うには、お城の屋根瓦が(向₁₆₆ うには、おしろ₁₆₇ の屋根がわら₁₆₈ が) 赤い布のやうにさきつゞいて(赤いきれ₁₆₉ のやうにさき続₁₇₀ いて) カーン、カーンと鐘が鳴つて来ました。(カーン、カーンと₁₇₁ かね₁₇₂ が鳴つてき₁₇₃ ました。) 葬式の(そう₁₇₄ 式の)
- 4段目 葬列のものたちがやつて来るのがちらく見えはじめました。(そう₁₇₅ 列の者₁₇₆ たちがやつてく₁₇₇ るのが₁₇₈ ちらちら見え始₁₇₉ めました。) 話声も(話し₁₈₀ 声も) 葬列は墓地へはいつて来ました。(そう₁₈₁ 列は墓地へ入₁₈₂ ってきた₁₈₃ ました。) ふみをられてみました。(ふみ折₁₈₄ られていました。)
- 5段目 ごんはのびあがつて(ごんは₁₈₅ のびあがつて) かみしもをつけて、(かみしもを着₁₈₆ けて、) 位牌をささげてみます。(位はい₁₈₇ をささげています。) いつもは赤いさつま芋みたいな(いつもは₁₈₈ 赤いさつまいも₁₈₉ みたいな) けふはなんだか

／₂₈₄ と、ぶつぶつ)

- 6 段目 かはいさうに兵十は、(「か₂₈₅ わいそうに兵十は、) あんな傷までつけられたのか。
／(あんなきず₂₈₆ まで付₂₈₇) けられたのか。 上₂₈₈)
- 7 段目 物置の方へまはつて (物置の方へ回₂₈₉ って、下₂₉₀) 栗をおいてかへりました。(くり₂₉₁)
を置₂₉₂ いて帰₂₉₃ りました。)
- 8 段目 つぎの日も、そのつぎの日もごんは、栗をひろつては、次₂₉₄ (次₂₉₅) の日も、その次₂₉₆
の日も、下₂₉₇ ごんは、くり₂₉₈ を拾₂₉₉ っては) 兵十の家へもつて来てやりました。(兵
十のうち₃₀₀ へ持₃₀₁ ってき₃₀₂ てやりました。) そのつぎの日には、栗ばかりでなく、
まつたけも二三ぼんもつていきました。(その次₃₀₃) の日には、くり₃₀₄ ばかりでなく、
松₃₀₅ たけも二、下₃₀₆ 三本₃₀₇ 下₃₀₈ 持₃₀₉ っていきました。)

四 (4₃₁₀)

- 1 段目 月のいゝ晩でした。(月のいいばん₃₁₁) でした。) ぶらく あそびに出かけました。
(ぶらぶら遊₃₁₂ びに出かけました。) 中山さまのお城の下を通つてすこしいくと、
(中山様₃₁₃ のおしろ₃₁₄) の下を通つて、下₃₁₅ 少₃₁₆ し行₃₁₇ くと、) 道の向うから、(道
の向こ₃₁₈ うから、) 話声が聞えます。(話し₃₁₉ 声が聞こ₃₂₀ えます。) チンチロ
リンと松虫が (チンチロリンと 下₃₂₁ 松虫が)
- 2 段目 ごんは、道の片がはにかくれて、(ごんは、道のかた₃₂₂ 側₃₂₃ にかくれて、) 話声は
(話し₃₂₄ 声は) 「さうく、なあ加助。」と、兵十がいひました。／(「そうそう、
なあ 下₃₂₅ 加助。」 下₃₂₆ と、兵十が 言₃₂₇ いました。／) 「あゝん？」(「ああん 下₃₂₈」)
とても 下₃₂₉ ふしぎなことがあるんだ。」／(とても 不思議₃₃₀ なことがあるんだ。」)
「何が？」／(「何が 下₃₃₁」) 「お母が死んでからは、(「おつかあ₃₃₂ が死んで
からは、) 栗やまつたけなんかを、まいにちくくれるんだよ。」／(くり₃₃₃ や松₃₃₄
たけなんかを、毎日毎日₃₃₅ くれるんだよ。」) 「だれが？」(だれが 下₃₃₆) 「そ
れがわからんのだよ。おれの知らんうちに、下₃₃₇ おいていくんだ。」／(「それが 分₃₃₈
からんのだよ。おれの知らんうちに 置₃₃₉ いていくんだ。」) 二人のあとをつけてい
きました。／(二人の後₃₄₀ をつけていきました。／) 「ほんとかい？」／(「ほん
とかい 下₃₄₁」) その栗を (そのくり₃₄₂ を) へんなこともあるもんだなア。」
(変₃₄₃ なこともあるもんだな あ₃₄₄。)」
- 3 段目 なし
- 4 段目 加助がひよいと 下₃₄₅ 後を見ました。(加助が 下₃₄₆ ひよいと後ろ₃₄₇ を見ました。) た
ちどまりました。(立₃₄₈ ち止₃₄₉ まりました。) さつさとあるきました。(さつさと
歩₃₅₀ きました。) お百姓の家まで (お百姓の うち₃₅₁ まで) そこへはいつていきま
した。(そこへ 入₃₅₂ っていきました。) ポンく ポンく と木魚の音が (ポンポンポ
ンポンと、下₃₅₃ 木魚の音が) 窓の障子にあかりがさしてゐて、(まど₃₅₄ の しょうじ₃₅₅)
に 明₃₅₆ かりが 差₃₅₇ して、) 大きな坊主頭がうつつて (大きな ぼうず₃₅₈ 頭がう
つつて、下₃₅₉) ごんは、下₃₆₀ 「おねんぶつがあるんだな。」と (ごんは、「お念仏₃₆₁
があるんだな。」) 井戸のそばに (いど₃₆₂ のそばに) また三人ほど、下₃₆₃ 人がつ
れだつて (また三人ほど人が 連₃₆₄ れ 立₃₆₅ っつて、下₃₆₆) 家へはいつていきました。お
経を (うち₃₆₇ へ 入₃₆₈ っつていきました。 下₃₆₉ おきょう₃₇₀ を) きこえて来ました。(聞₃₇₁)

こえてき₃₇₂ました。)

五 (5₃₇₃)

- 1 段目 おねんぶつが (お念仏₃₇₄ が) 井戸のそばに (いど₃₇₅ のそばに) 兵十と加助はまた一しょにかへつていきます。(兵十と加助は、₃₇₆ またいつ₃₇₇ しょに帰₃₇₈ っています。) 話をきかうと (話を聞₃₇₉ こうと) 兵十の影法師をふみく きました。(兵十のかけぼうし₃₈₀ をふみふみ行₃₈₁ きました。)
- 2 段目 お城の (おしろ₃₈₂) の 加助が言ひ出しました。 / (加助が言いだ₃₈₃ しました。 /) 神さまのしわざだぞ。」 / (神様₃₈₄ のしわざだぞ。」 / ₃₈₅) 「えっ?」と、兵十は (「えっ。₃₈₆」 / ₃₈₇) と、兵十は 「おれは、₃₈₈ あれからずつと (「おれはあれからずつと) それあ、(そりや₃₈₉、) 神さまだ、神さまが、(神様₃₉₀ だ、神様₃₉₁) が、) 思はつしやつて、(思わつしやつて₃₉₂、) ものをめぐんで下さるんだよ。」 / (物₃₉₃ をめぐんでくだ₃₉₄ さるんだよ。」 /) まいにち、神さまに (毎日₃₉₅、神様₃₉₆) に)
- 3 段目 へえ、こいつはつまらないなと思ひました。(「₃₉₇ へえ、こいつはつまらないな。」₃₉₈) と思ひました。) おれが、栗や松たけを (「₃₉₉ おれが、くり₄₀₀ や松たけを) お礼をいはないで、(お礼を言₄₀₁ わないで、) 神さまにお礼をいふんぢゃアおれは、₄₀₂ (神様₄₀₃ にお礼を言₄₀₄ うんじゃあ₄₀₅、₄₀₆ おれは) 引き合はないなあ。(引き合はないなあ。₄₀₇)

六 (6₄₀₈)

- 1 段目 そのあくる日もごんは、(その明₄₀₉ くる日も、₄₁₀ ごんは、₄₁₁) 栗をもつて、(くり₄₁₂ を持₄₁₃ って、) 兵十の家へ (兵十のうち₄₁₄ へ) 兵十は物置で縄を (兵十は、₄₁₅ 物置でなわ₄₁₆) を) それでごんは家の裏口から、(それで、₄₁₇ ごんは、₄₁₈ うち₄₁₉ のうら₄₂₀ 口から、) 中へはいりました。 / (中へ入₄₂₁ りました。 /)
- 2 段目 顔をあげました。(顔を上₄₂₂ げました。) と狐が家の中へはいつた (と、₄₂₃ きつね₄₂₄ がうち₄₂₅ の中へ入₄₂₆ った) こなひだうなぎを (こないだ、₄₂₇ うなぎを) ごん狐めが、(ごんぎつね₄₂₈ めが、) 兵十は立ちあがつて、納屋に (兵十は立ち上₄₂₉ がつて、なや₄₃₀) に) 火縄銃をとつて、火薬をつめました。 / ₄₃₁ (火なわじゅう₄₃₂ を取₄₃₃ って、火薬をつめました。)
- 3 段目 そして足音を (そして、₄₃₄ 足音を) ちかよつて、(近₄₃₅ よつて、) 今戸口を出やうとするごんを、(今、₄₃₆ 戸口を出ようとするごんを、) ドンと、₄₃₇ うちました。(ドンとうちました。 / ₄₃₈) ばたりとたほれました。(バタリ₄₃₉ とたおれました。 / ₄₄₀) 兵十はかけよつて来ました。(兵十はかけよつてき₄₄₁ ました。)
- 4 段目 「おや。」と兵十は、₄₄₈ (「おや。」 / ₄₄₉ と、₄₅₀ 兵十は) 目を落しました。 / (目を落₄₅₁ としました。 /) お前だつたのか。いつも栗をくれたのは。」 / (お前₄₅₂ だつたのか、₄₅₃ いつも、₄₅₄ くり₄₅₅ をくれたのは。)
- 5 段目 火縄銃をばたりと、とり落しました。(火なわじゅう₄₅₆ をバタリ₄₅₇ と取₄₅₈ り落₄₅₉ しました。) 煙が、(けむり₄₆₀ が、) 筒口から (つつ₄₆₁ 口から)

以上が『赤い鳥』『ごん狐』と教材「ごんぎつね」との異同である。以下に異同の性質上からの分類を挙げておく。

(1) 「学年別漢字配当表」に従って書き替えられたと推定される異同 (256箇所)

A 漢字(「ごん狐」)→仮名(「ごんぎつね」) 86箇所

- ・狐→きつね(「〇〇ぎつね」含む) 7箇所 1)・14)・15)・16)・114)・424)・428)
- ・城→しろ 4箇所 10)・167)・314)・382)
- ・穴→あな 5箇所 20)・36)・132)・196)・251)
- ・芋→いも 2箇所 25)・189)
- ・裏→うら 6箇所 28)・136)・234)・249)・264)・420) (但し「ごん狐」二1段目に「うら」と表記。)
- ・堤→つつみ 1箇所 41)
- ・萩→はぎ 2箇所 49)・66)
- ・株→かぶ 1箇所 50)
- ・腰→こし 2箇所 59)・155)
- ・網→あみ 4箇所 64)・70)・98)・202)
- ・黒子→ほくろ 1箇所 67)
- ・袋→ふくろ 2箇所 73)・89)
- ・芝→しば 1箇所 76)
- ・腹→はら 2箇所 83)・85)
- ・又→また 1箇所 88)
- ・鍛冶屋→かじ屋 1箇所 140)
- ・髪→かみ 1箇所 143)
- ・太鼓→たいこ 1箇所 148)
- ・井戸→いど 5箇所 151)・215)・256)・362)・375)
- ・鍋→なべ 1箇所 159)
- ・煮えて→にえて 1箇所 160)
- ・葬式→そう式 2箇所 162)・174)
- ・葬列→そう列 1箇所 175)
- ・鐘→かね 1箇所 172)
- ・晩→ばん 2箇所 195)・311)
- ・床→とこ 1箇所 198)
- ・貧しい→まずしい 1箇所 221)
- ・途中の→とちゅうの 1箇所 253)
- ・栗→くり 10箇所 259)・291)・298)・304)・333)・342)・400)・412)・444)・455)
- ・茶碗→茶わん 1箇所 268)
- ・かすり傷→かすりきず 2箇所 273)・286)
- ・盗人→ぬすびと 1箇所 282)
- ・片→かた 1箇所 322)
- ・窓→まど 1箇所 354)

- ・障子→しょうじ 1箇所 355)
- ・坊主頭→ぼうず頭 1箇所 358)
- ・お経→おきょう 1箇所 370)
- ・影法師→かげぼうし 1箇所 380)
- ・縄→なわ 1箇所 416)
- ・火縄銃→火なわじゅう 2箇所 432) ・456)
- ・納屋→なや 1箇所 430)
- ・煙が→けむりが 1箇所 460)
- ・筒口→つつ口 1箇所 461)

「ごん狐」における常用漢字外の漢字表記の訂正については「C」に挙げる。件数でいえば「B」の方が多いのだが、これは無論「ごん狐」が教材「ごんぎつね」より低年齢の児童を対象として書かれたということの意味してはいない。いずれにせよ「ごん狐」では殆どの漢字にルビが付されているので児童にとっても読むにはさほど苦勞を要しないだろう。

B 仮名→漢字 137箇所 (但し「*」は別にも挙げる)

- ・きいた(き)→聞いた(聞) 3箇所 4) ・371) ・379)
- ・むかし→昔 1箇所 5)
- ・ちかく(ちか)→近く(近) 2箇所 7) ・435)
- ・ところ→所 6箇所 8) ・55) ・60) ・99) ・216) ・257) (但し「ごん狐」一9段目「ところ<」は「ところどころ」と表記。)
- ・中山さま→中山様 2箇所 11) ・313)
- ・おとのさま→おとの様 1箇所 12)
- ・神さま→神様 5箇所 384) ・390) ・391) ・396) ・403)
- ・一しょうけんめいに→一生けんめいに 1箇所 123) *
- ・あたり→辺り 2箇所 21) ・44)
- ・きこえて来ました→聞こえてきました 1箇所 372) *
- ・はたけ→畑 1箇所 23)
- ・はいつて(はい)→入って(入) 8箇所 24) ・78) ・182) ・242) ・352) ・368) ・421) ・426)
- ・ほりちらし→ほり散らし 1箇所 26)
- ・とつて(と)→取って(取) 4箇所 31) ・204) ・433) ・458)
- ・あがる(あ)→上がる(上) 4箇所 37) ・117) ・422) ・429)
- ・あげ→上げ 1箇所 75)
- ・上り→上がり 1箇所 90)
- ・黄いろく→黄色く 1箇所 51)
- ・ぬかるみみち→ぬかるみ道 1箇所 53)
- ・きもの→着物 1箇所 58)
- ・つけて→着けて 1箇所 186)
- ・まるい→円い 1箇所 65)

- ・ついて (つ) →付いて (付) 6箇所 67) ・104) ・121) ・141) ・273) ・287)
- ・うしろ→後ろ 1箇所 72)
- ・後→後ろ 2箇所 225) ・347)
- ・あと→後 1箇所 340)
- ・もち (も) →持ち (持) 8箇所 74) ・91) ・203) ・241) ・269) ・301) ・309) ・413)
- ・もの→物 2箇所 80) ・393)
- ・もの→者 1箇所 176)
- ・ふとい→太い 1箇所 81)
- ・木ぎれ→木切れ 1箇所 77)
- ・おいといて (お) →置いといて (置) 4箇所 94) ・292) ・339) ・446) (但し「ごん狐」では「物置」と表記)
- ・なげこみました→投げこみました 1箇所 100)
- ・とび (と) →飛び (飛) 4箇所 95) ・116) ・121) ・122)
- ・いひ (い) →言い (言) 4箇所 277) ・327) ・401) ・404)
- ・ひとりごと→ひとり言 1箇所 276)
- ・ふりかへつて→ふり返って 2箇所 126) ・254)
- ・はづして→外して 1箇所 130)
- ・そと→外 1箇所 133)
- ・おはぐろ→お齒黒 1箇所 138)
- ・とほる→通る 1箇所 142) (但し「ごん狐」四 1 段目では「通つて」と表記)
- ・あつまつて→集まって 1箇所 154)
- ・さげ→下げ 1箇所 157)
- ・いって (い) →行って (行) 5箇所 165) ・227) ・263) ・317) ・381)
- ・見えはじめ→見え始め 1箇所 179)
- ・ふみをられて→ふみ折られて 1箇所 184)
- ・けふ→今日 1箇所 190)
- ・おもひ→思い 1箇所 212)
- ・いきのいゝ→生きのいい 1箇所 229)
- ・つんだ→積んだ 1箇所 238)
- ・すきまに→すき間に 1箇所 244)
- ・つぎの日→次の日 4箇所 258) ・295) ・296) ・303)
- ・ひろつて→拾って 1箇所 260) ・299)
- ・たべ→食べ 1箇所 267)
- ・へんな→変な 2箇所 270) ・343)
- ・まはつて→回って 1箇所 289)
- ・かへりました (かへ) →帰りました (帰) 2箇所 293) ・378)
- ・まつたけ→松たけ 2箇所 305) ・334) (「ごん狐」五 3 段目に「松たけ」表記あり)
- ・あそびに→遊びに 1箇所 312)
- ・すこし→少し 1箇所 316)
- ・がは→側 1箇所 323)

- ・ふしぎな→不思議な 1 箇所 330)
- ・まいにちく→毎日毎日 1 箇所 335)
- ・まいにち→毎日 1 箇所 395)
- ・わからん→分からん 1 箇所 338)
- ・たちどまりました。→立ち止まりました。計 2 箇所 349)
- ・あるきました→歩きました 1 箇所 350)
- ・あかり→明かり 1 箇所 356)
- ・さして→差して 1 箇所 357)
- ・おねんぶつ→お念仏 2 箇所 361) ・374)
- ・つれだつて→連れ立って計 2 箇所 365)
- ・そのあくる日も→その明くる日も 1 箇所 409)
- ・かためて→固めて 1 箇所 445)

教材としては既に学習したものについては漢字表記となる。しかしながら漢字は表意文字であるが故に、表記されたものには一定の意味に固定させられるという弊害もある。たとえば「きいた(き)→聞いた(聞)」の3箇所については、「きこえて来ました」→「聞こえてきました」はさておき、「おぢいさんからきいた」→「おじいさんから聞いた」および「話をきかうと」→「話を聞こうと」では他に当て嵌めることが可能な字、例えば「聴」などはテキストから排除される。他に「ごん狐」において子どもに語りかけられた柔らかい語感が、漢字の使用によって喪失されるという虞も払拭できない。例えば「ごん狐」で用いられた尊称、「中山さま」(2箇所)「おとのさま」(1箇所)「神さま」(5箇所)が、教材「ごんぎつね」では「中山様」「おとの様」「神様」となり、子どもに語りかけられた物語としての柔らかさがなくなる。「おねんぶつ」→「お念仏」(2箇所)も同様である。更にこの「ごん狐」が、再話者である「私」が幼少時聴いた「村の」住人である「茂平といふおぢいさん」によって語られた物語であるという説話性、農村的共同体の中で編み出された素朴な文体をも喪失してしまうことになる。後にも指摘するが、「権狐」が「ごん狐」へと、「南吉の感傷主義に大なたをふるって、腕白でオプティミスティックな『ごんぎつね』を掘り出」⁷され、それが更に合理的で読み易い教材「ごんぎつね」を創り出してはいまいか。今後検証して行くべき課題と認識している。

C その他 33箇所

- ・私→わたし 2 箇所 3) ・6) (「私→わたし」は常用漢字音訓表にない読み)
- ・或→ある 1 箇所 32) (「或」は常用漢字外)
- ・キュッと言つて→キュッとって 1 箇所 107) (不詳 うなぎが話したわけではないので仮名表記にしたか?)
- ・家→うち 14 箇所 135) ・141) ・152) ・163) ・240) ・262) ・281) ・300) ・351) ・367) ・414) ・419) ・425) ・441) (<うち>は常用漢字外の読み)
- ・手拭→手ぬぐい 1 箇所 156) (「拭」は常用漢字外)
- ・午→昼 2 箇所 164) ・266) (「午→ひる」は常用漢字音訓表にない読み)
- ・屋根瓦→屋根がわら 1 箇所 168) (「瓦」は常用漢字外)
- ・赤い布→赤いきれ 1 箇所 169) (「布→きれ」は常用漢字音訓表にない読み)

- ・大きな→おおきな 1箇所 158) (不詳 連体詞「おおきな」は「大きな」と表記しても差し支えない。)
- ・位牌→位はい 1箇所 187) (「牌」は常用漢字外)
- ・お母→おっかあ 7箇所 193)・197)・207)・210)・219)・222)・332) (「ごん狐」ルビの読みを指定するためか?)
- ・頬ぺた→ほっぺた 1箇所 272) (「頬」は常用漢字外)

(2) 語句の表記上の問題に関わる異同 (66箇所)

D 傍点をなくしたもの 8箇所

- ・しだ→しだ 1箇所 17)
- ・はりきり→はりきり 4箇所 63)・69)・97)・201)
- ・うなぎ→うなぎ 1箇所 80)
- ・きす→きす 1箇所 84)
- ・はん→はん 1箇所 125)

「はりきり」の4箇所を除き、「ごん狐」では上記の語句の初出時に傍点を付して表記している。

E ルビ等に関するもの 3箇所

- ・とんがらし→とんがらし 1箇所 30)
(とんがらし)
- ・思はつしやつて→思おもうわつしやつて 1箇所 392)
(おもうになつて、)
- ・お前まいだつたのか→お前おまえだつたのか 1箇所 452)

ここで指摘したのは「ごんぎつね」に表出した方言(または俚言)に対する標準語表記を括弧付きで記したものである。但し「ごんぎつね」には「きす」等、注を施していない俚言と思われる語が他にもある。

「ごん狐」は原則総ルビであるが、「ごんぎつね」では原則新出漢字等に限られる。光村版「ごんぎつね」では以下15箇所がすべてである。

「新美にいみ 南吉なんきち」「かすやまさひろ 昌宏もへい」「茂平なかやま」「中山しょう」「百姓家ひょうじゅう」「兵十やすけ」「弥助しんべえ」「新兵衛」
「大勢ぜい」「墓地ぼ」「六地藏ぞう」「加助かすけ」「吉兵衛きちべえ」「お念仏ぶつ」「お前まい」

F 送りがなに関するもの 10箇所

- ・向う→向こう 4箇所 109)・166)・226)・318)
- ・向つて→向かって 1箇所 252)
- ・いわし売→いわし売り 1箇所 237)
- ・話声→話し声 3箇所 180)・319)・324)
- ・落し→落とし 1箇所 459)

G 符号に関するもの 5箇所

- ・「あゝん？」→「ああん。」 1箇所 328)

- ・「何が？」→「何が。」1箇所 331)
- ・「だれが？」→「だれが。」1箇所 336)
- ・「ほんとかい？」→「ほんとかい。」1箇所 341)
- ・「えっ？」→「えっ。」1箇所 386)

以上はすべて「ごん狐」での「？」表記を句点に改めたものである。

H オノマトペに関するもの 4箇所

- ・きんく→キンキン 1箇所 40)
- ・「とぼん」→トボン 1箇所 101)
- ・ばたり→バタリ 2箇所 439)・457)

後に挙げる読点の異同でより顕著となるが、上記「ごん狐」において平仮名表記のオノマトペが片仮名となることで、エクリチュール印象は大きく変わってくる。

百舌鳥の音がきんく、ひびいてみました。→もずの音がキンキンひびいていました。

どの魚も、「とぼん」と音を立てながらにごった水の中へもぐりこみました。→どの魚も、トボンと音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。

ごんは、ばたりとたほれました。→ごんは、バタリとたおれました。

兵十は、火縄銃をばたりと、とり落しました。→兵十は、火なわじゅうをバタリと取り落としました。

他に当項目には入れないが、二二段目「何かぐづぐづ煮えてみました」→「何かぐずぐずにえていました」も印象的に違ったものとなっていることが窺える。

I 補助動詞の表記法に関するもの 14箇所

- ・出て来て→出てきて 1箇所 22)
- ・出て来ました→でてきました 1箇所 42)
- ・やって来ますと→やってきますと 1箇所 149)
- ・やって来る→やってくる 1箇所 177)
- ・鳴つて来ました→鳴ってきました 1箇所 173)
- ・はいつて来ました→入ってきました 1箇所 183)
- ・とつて来て→取ってきて 1箇所 205)
- ・出来なかつた→できなかつた 1箇所 208)
- ・もつてはいました→持って入りました 1箇所 241)
- ・もつて来て→持ってきて 1箇所 301)
- ・きこえて来ました→聞こえてきました 1箇所 372) *
- ・かけよつて来ました→かけよってきました 1箇所 441)
- ・めぐんで下さる→めぐんでくださる 1箇所 394)
- ・(〇〇て)見ました(見)→みました(み) 4箇所 56)・126)・255)・265)

J 副詞等の表記に関するもの 8箇所

- ・一ばい→いっばい 1箇所 18)
- ・一ばん→いちばん 2箇所 71)・103)
- ・一しょ→いっしょ 2箇所 86)・377)
- ・一しょうけんめいに→一生けんめいに 1箇所 123) *
- ・一たい→いったい 1箇所 278)
- ・何しろ→なにしろ 1箇所 104)

K 促音便等の表記に関するもの 8箇所

- ・つっこんで→つっこんで 1箇所 102)
- ・うわア→うわあ 1箇所 111)
- ・ぢゃア→じゃあ 1箇所 405)
- ・だァい→だあい 1箇所 228)・231)
- ・へんなこともあるもんだなア。」→変なこともあるもんだなあ。」 1箇所 344)
- ・いふんぢゃア→言うんじゃあ 1箇所 405)
- ・ぬすと→ぬすつと 1箇所 113)
- ・それあ→そりゃ 1箇所 389)

L その他 6箇所

漢数字→アラビア数字 6箇所 2)・134)・213)・310)・373)・408)

(3) 句読点、改行等に関する異同 (119箇所)

M 読点を省いたもの 36箇所

13)・27)・29)・38)・43)・47)・48)・54)・61)・62)・110)・119)・124)・128)・129)・137)・150)・153)・192)・211)・214)・217)・232)・236)・245)・261)・283)・294)・328)・337)・345)・363)・388)・402)・437)・448)

N 読点を加えたもの 61箇所

9)・19)・33)・35)・46)・52)・57)・79)・87)・90)・93)・96)・102)・112)・120)・131)・171)・178)・185)・188)・199)・200)・206)・218)・220)・224)・230)・235)・239)・243)・246)・271)・279)・280)・290)・297)・306)・308)・315)・321)・325)・346)・353)・359)・366)・376)・406)・410)・411)・415)・417)・418)・423)・427)・434)・436)・443)・447)・450)・453)・454)

O 読点を句点に替えたもの 1箇所 453)

P 改行したもの 10箇所 115)・235)・284)・326)・369)・385)・387)・438)・440)・449)

Q 改行をなくしたもの 9箇所 144)・145)・161)・191)・194)・223)・275)・360)・

431)

R 「」を附したもの 2箇所 101)・288)

数量だけを観るなら、読点は教材に加えられたものの方が多く、改行は教材において新たに加えられたものが多い。しかしながら読点の多さは、文章そのものの読みにくさとは比例せず、むしろ教科書の方が合理的に句読法が施されているのだが、ここでは1箇所のみ指摘しておく。

兵十は、立ちあがつて、納屋にかけてある火縄銃をとつて、火薬をつめました。∠そして足音をしのばせてちかよつて、今戸口を出ようとするごんを、ドンとうちました。ごんは、ぱたりとたほれました。兵十はかけよつて来ました。家の中を見ると土間に栗が、かためておいてあるのが目につきました。(「ごん狐」)

兵十は立ち上がつて、なやにかけてある火なわじゅうを取つて、火薬をつめました。そして、足音をしのばせて近よつて、今、戸口を出ようとするごんを、ドンとうちました。∠ごんは、バタリとたおれました。∠兵十はかけよつてきました。うちの中を見ると、土間にくりが固めて置いてあるのが、目につきました。(「ごんぎつね」)

問題は読点や改行の数ではなく、どこにそれを施したかである。上記引用以外でも、「ごん狐」においては緊迫した場面ほど読点や改行が少なくなり、読者に息をつかせずに読ませようとする。それが「ごんぎつね」ではより冷静に句読法が施され、それが全体の教材としての読みやすさ、理解のしやすさにつながっているように思われるのである。以下、次稿にて詳述する。

注

- 1 鶴田清司『なぜ日本人は「ごんぎつね」に惹かれるのか』2005年11月 明拓出版
- 2 田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力小学校編4年』2001年3月教育出版、同『これからの文学教育のゆくえ』2005年7月右文書院他。
- 3 『永遠なるものとの対話』1983年3月 新教出版社
- 4 『岡山大学教育学部研究集録』111号 1999年7月
- 5 1980年7月大日本図書
- 6 1992年6月
- 7 水谷昭夫「新美南吉の世界」前掲。